

評価の高い作文はどのように修正されたか

－「韓国と日本」をテーマとする作文の分析から－

小松奈々（高麗大学校）

1. はじめに

本発表では、評価の高い作文の書き手が、協働推敲活動¹を経て自身の作文をどのように修正し、完成させていったのかを作文プロダクトの分析結果に基づいて説明していく。

本研究の目的は、自律的な作文の書き手が自身の作文作成において協働推敲活動をどのように位置付けているかを解明し、作文指導に向けた提案を行うことにある。日本語学習者が協働推敲活動をどのように位置付けているかに関しては、これまで、学習者は仲間から受ける様々なフィードバックが妥当であるかどうか判断し、採用することができるとする報告（田中2010）もある一方で、一部の学習者はピア・フィードバックのうち言語形式の指摘などの修正しやすいものだけを作文に反映する傾向があるとする報告（小松2019a）もある。そこで、本研究では、特に評価の高い作文の作文修正過程に注目し、協働推敲活動前後の作文の比較を行い、その変化を手がかりに、学習者と協働推敲活動との関係性を考察する。

2. 先行研究と研究課題

2.1 作文プロダクトの変化に注目した研究

学習者が自分の力だけで書いた初稿（以下、第一作文）と、協働推敲でのフィードバックを経た後に修正して完成させた作文（以下、推敲作文）との変化を探る研究では、完成した作文には論理性や文章全体のまとまり、内容的な深まりが生まれると言われている（原田2016, 小松2019b）。原田（2016）では、「日本語表現」クラスでの意見文の作成において、推敲作文では、異なり語数が増加する傾向が見られ、第一作文に比べて多様な語彙を用いるようになることがわかった。そのほか、論理性の指標となる指示語、文末表現、接続表現等が増加しており、文章の論述性が増していることを指摘している。そして、小松（2019b）では、推敲作文では、作文を客観的に捉え、できるだけ構成を明確にするような表現が用いられ、内容面においてはテーマと自分自身とを密に関連づけた文章へと変化している様子が観察された。ただし、原田（2016）の主な対象者は日本語母語話者であり、小松（2019b）は推敲作文の評価得点によらない全体傾向を示したものである。

2.2 評価が高い作文の変化に注目した研究

評価が高い作文が第一作文から推敲作文までどのように変化していったかを探った研究としては、小松（2019a）が挙げられる。小松（2019a）では、協働推敲活動でのフィードバックを自身の作文にどの程度反映したか、そして指摘を受けなかった箇所の中でどの程度自己修正を行ったかを調査した。その後、文章にどのような変化が起こったのかを観察した。その結果、ピア・フィードバックの反映率、自己修正率ともに評価上位群の方が高

¹ 学習者同士が互いの作文について、書き手と読み手の立場を交代しながら検討し合う活動は、協同／協働推敲活動あるいはピア・レスポンスと呼ばれる。本発表ではこの活動を協働推敲活動と統一して表記する。

く、第一作文の形にとらわれず積極的に自己推敲および修正を行う傾向があることが明らかにされた。しかしながら、小松（2019a）では、変化の指標を文章能力に関する3種類と日本語能力に関する2種類の計5種類に大別し、フィードバック内容および修正内容を5種に振り分けた後、指標別に頻度の変化を分析するという方法が取られており、具体的にどのような語や表現の変化が見られたのかは、作文例で示されたもののほかには不明である。

2.3 研究課題

以上のような先行研究の知見および残された課題を踏まえ、本研究では、高い評価を受けた作文が表現面、ひいては内容面でどのように変化しているのか、計量テキスト分析という手法を用いて探っていく。研究課題を以下に示す。

課題1．評価の高い作文の単語数は第一作文から推敲作文にかけてどう変化したか。

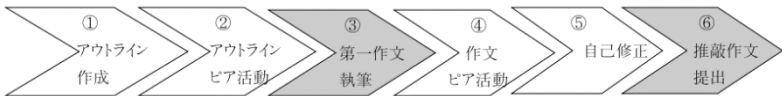
課題2．評価の高い作文の単語の使用様相は第一作文から推敲作文にかけてどう変化したか。

2-1. 特徴的な語はどう変化したか。

2-2. 単語の難易度はどう変化したか。

3. 研究方法

データとなる作文は、2018年前期にソウル市内のA大学で開講された作文授業内で収集された。



<図1> 協働推敲を含む作文作成過程

作文作成は図1の手順で行い、①から⑥までには4週間を要した。本研究ではこのうち、③の第一作文から⑥の推敲作文への変化に注目する。

作文の評価は、推敲作文64本を対象に、日本語教育に従事する母語話者教師3名が行った。評価基準は田中（2013）の「マルチプルトレイト評価基準」を参考にした。文章能力に関わる「内容」「構成」「読者への配慮」の3項目と日本語能力に関わる「日本語の正確さ」「日本語の適切さ」の2項目、計5項目の採点基準を置き、それぞれ4段階のレベルを設定した。各項目で評価した値の平均を作文の評定値とし、3名の評定値の差が0.5以下の場合是一致しているとみなし、3名の評定値の平均を最終評定値とした。

本研究では、64本の作文のうち選択率の最も高かった「韓国と日本」をテーマとして書かれた²29本（第一作文を含めて58本）の作文を分析する。作文評価の上位群および下位群のデータ概要を表1に示す。

<表1> 上位群および下位群のデータ概要

	作文数 (第一作文を含んだ数)	作成者の母語	作成者の 平均日本語学習歴	評定平均値 (SD)
上位群	17本 (34)	韓国語16、中国語1	41.35ヶ月	3.51(0.26)
下位群	12本 (24)	韓国語8、中国語4	39.92ヶ月	2.70(0.27)

² 作文のテーマは「私と日本語」「私と学校」「私とスポーツ」「韓国と日本」の4種類から選択できるものとした。また、中国出身の学習者は「韓国と日本」「中国と日本」のいずれのテーマでも良いとした。

4. 結果

4.1 課題1 単語数の変化

課題1では、計量テキスト分析ツール「KH Coder」による記述統計をもとに、総抽出語数および異なり語数の第一作文から推敲作文への増減を調査した（表2）。なお、表の数値は、助詞や助動詞、形式名詞等、繰り返し用いられる語を除外して算出されたものである。

〈表2〉 第一作文から推敲作文への単語数の推移（括弧内は異なり語数）

	第一作文	推敲作文	単語増加数	作文本文数	作文一本あたりの平均単語増加数
上位群	2, 448 (896)	2, 586 (905)	+138 (+9)	17	+8. 12 (+0. 53)
下位群	1, 425 (566)	1, 613 (620)	+188 (+54)	12	+15. 67 (+4. 50)

まず、総抽出語数を見ると、上位群では一本あたり8語程度増加している一方、下位群ではその倍近くの増加が見られた。また、異なり語数を見ると、上位群で一本あたりの増加数が1語以下なのに対し、下位群では一本あたり4語以上増加している。下位群と比較すると、上位群では変化が少なく、特に異なり語においては、第一作文と推敲作文ではほぼ同数であることがわかる。ただし、それは第一作文と推敲作文で同じ単語を使っていることを示すものではなく、新たな表現に置き換わっている可能性もある。一方で下位群では、作文の総分量が増え、さらに単語のバラエティも増えていることがわかる。

4.2 課題2 単語の質の変化

課題2-1では、KH Coderの関連語検索を用い、第一作文、推敲作文それぞれの作成段階において特に多く出現している語を抽出し、各段階を特徴づけるような語が何かを探る。分析にはJaccardの類似性測度が使用されており、1に近づくほど関連が強いことを示している。上位群および下位群の結果を表3、表4に示す。

〈表3〉 上位群の関連語検索結果

第一作文	推敲作文
多い .444	思う .407
見る .364	文化 .385
国 .348	<u>違い</u> .364
場合 .333	<u>両国</u> .364
料理 .304	<u>違う</u> .360
良い .286	<u>異なる</u> .348
たくさん .250	一般 .348
行く .250	人 .333
受ける .238	持つ .318
驚く .222	高い .304

〈表4〉 下位群の関連語検索結果

第一作文	推敲作文
文化 .524	思う .476
人 .389	<u>違う</u> .400
日本人 .389	<u>共通</u> .389
マナー .267	<u>両国</u> .389
<u>異なる</u> .267	<u>近い</u> .375
<u>それぞれ</u> .231	多く .357
出る .231	食べる .353
選ぶ .231	最近 .333
考える .214	重要 .313
国家 .214	活動 .231

上位群の第一作文では「国」「場合」「料理」など、各国の特徴的な事柄の叙述に用いられたと考えられる単語が見られる。一方で、推敲作文では「違い」「違う」「異なる」という、二国の相違点に関連した語彙が特徴的に現れている。一方で、下位群では、第一作文では「異なる」「それぞれ」、推敲作文では「違う」「共通」「近い」などの語が見られ、どちらの段階でも二国の相違点や共通点に関して言及していることが推測される。

特徴語に大きな変化が見られない下位群と比較すると、上位群では、第一作文から推敲作文にかけて特徴語の傾向が大きく変化している様子がわかる。

課題2-2では、第一作文、推敲作文間の単語の難易度の変化に注目した。難易度判定には日本語読解学習支援システムであるリーディングチュウ太(<http://language.tiu.ac.jp>)の語彙レベル判定機能を用いた。第一作文と推敲作文で重複する単語は除外し、それぞれの作成段階でのみ使用された単語を対象として、難易度を比較した。名詞と動詞の2品詞を対象とした上位群および下位群の結果を表5に示す。

<表5> 各作成段階で現れた異なり語の難易度数（括弧内は比率）

		N1	N2N3	N4	N5	級外	総数
上位群	名詞	13 (17.1%)	24 (31.6%)	7 (9.2%)	7 (9.2%)	25 (32.9%)	76 (100.0%)
		6 (7.5%)	30 (37.5%)	9 (11.3%)	9 (11.3%)	26 (32.5%)	80 (100.0%)
	動詞	5 (17.9%)	13 (46.4%)	3 (10.7%)	5 (17.9%)	2 (7.1%)	28 (100.0%)
		3 (11.5%)	12 (46.2%)	3 (11.5%)	6 (23.1%)	2 (7.7%)	26 (100.0%)
下位群	名詞	10 (23.8%)	11 (26.2%)	5 (11.9%)	5 (11.9%)	11 (26.2%)	42 (100.0%)
		17 (18.5%)	28 (30.4%)	8 (8.6%)	13 (14.1%)	26 (28.3%)	92 (100.0%)
	動詞	3 (14.3%)	7 (33.3%)	3 (14.3%)	7 (33.3%)	1 (4.8%)	21 (100.0%)
		0 (0%)	8 (42.1%)	5 (26.3%)	4 (21.1%)	2 (10.5%)	19 (100.0%)

上位群では、N1レベルの単語の比率は10%台後半から10%前後まで下がっている一方で、N2からN5までの単語の出現比率は推敲作文の方が第一作文よりわずかに高い、あるいは同数程度である。このように、上位群では、異なり語の量は変わらないものの、その難易度においては第一作文から推敲作文にかけて難易度の高い語が減少する傾向が見られた。

一方で、下位群では、名詞ではN1およびN4レベルで第一作文の方が高いのに対し、N2N3およびN5レベルでは推敲作文の方が比率が高くなっている。動詞では、N1およびN5レベルでどちらも第一作文での比率の方が高い。以上のように、下位群では、第一作文より推敲作文の方が難易度が下がっているという全体的な傾向は見られない。その一方で、名詞の異なり語数は推敲作文で顕著に増加しており、難易度に関わらず、第一作文とは異なる単語を用いてより詳細に説明するという方法で修正が行われていることが推察される。

以上のように、計量テキスト分析による出現語の傾向を検討するほか、作文例の観察（紙幅の都合により省略する）により、評価の高い作文群では、学習者が自律的な書き手として、作文の修正過程において文章の輪郭をより明確にし、よりわかりやすい表現を選択しようとしていることが示唆された。

<参考文献>

- 小松奈々（2019b）「日本語学習者の作文作成過程における表現と内容の変化－協同推敲活動前後の作文の比較から－」『日本語学研究』第62号，pp. 5-23，韓国日本語学会
- 原田三千代（2016）「対話的推敲活動を通した文章テキストの変化－『日本語表現』クラスレポートをもとに－」『三重大学教育学部研究紀要』第67号，pp. 411-423，三重大学